

■研究十二月往来〈231〉

老連歌師と稚児

——一条良基書状の文学的構造——

岩崎雅彦

福田秀一氏が昭和40年7月に『芸能史研究』10号に紹介された二条良基の尊勝院あての書状(『良基消息詞』)は、良基が数日前に初めて会った少年世阿弥(藤若)を再び同道する

よう尊勝院に依頼したという内容で、この中で良基は美文を連ねて世阿弥の容貌と才能を称賛し、足利義満に見出された強運を強調している。良基はまた世阿弥が蹴鞠や連歌にも堪能であることを驚きをもって記している。そしてさらに崇光上皇の『不知記』の記事から、この時の世阿弥が十三歳で、良基と連歌を詠んでいたことが、伊地知鐵男氏によって明らかにされた(『観世』昭和42・10)。

天野文雄氏は本誌一月号に『良基消息詞』偽書説についての私見」と題する論考を発表され、この書状が偽書である(百瀬今朝雄氏説)か否かという問題について、多くの研究者の見解を聞かせてほしいと呼びかけられた。筆者もこの書状には以前から関心を持っていたので、この機会に意見を述べてみたい。もとより筆者はこの資料の真贋を判定する材料を持ち合わせているわけではない。そこで従

来の説どおり良基本人が書いたものであるという前提の上で、諸先学とはやや違った観点から考察を試みることにする。

通常の書状は用件を伝えるために書かれる実用的なものであるが、この良基の書状はそれとはかなり異質なものである。このことは諸氏がそろって指摘するところである。この点については表章氏が、良基は宛名の尊勝院だけでなく、足利義満に読んでもらうことを最初から意識して、言葉飾った藤若賛を書状の形式を借りて綴ったとされた(良基消息詞について)『鏡仙』昭和43・9)。表氏のこの指摘は、この資料の「作品的性格」(天野氏の表現)を看破したものと見える。

和漢の故事や古典を引用し、文学的表現を駆使して作られたこの書状は、言わば文学作品として読まれることを期待して書かれたと言つてよいだろう。その語句や表現には世阿弥の能や能楽論と重なるものも多く見られる。藤若の舞いぶりを讃えた部分の表現「秋の七草の花ばかり、夕露にしほれたるにもまさりて」は、『風姿花伝』第三「問答条々」で「し

ほれたる風情」を説明した「花のしほれたらんこそ面白けれ」という記述に通じる(松岡心平氏「花・幽玄・しほれ——稚児の美学——」『宴の身体——バサラから世阿弥へ——平成3』)。藤若の舞を霓裳羽衣の曲にたとえ、「玄宗の月の都へ入て」とするのは、「融」の「月の都に入り給ふよそほひ」に似る。

また、良基は我が身の老いと藤若への思いを述べ、「むもれ木になりはて候身の、いづくにか心の花も残りてん」と記しているが、「埋れ木」の語は「頼政」「実盛」「関寺小町」「西行桜」「錦木」「鶴」でも使われ、「心の花」も「西行桜」の「心の花は残りけるぞや」を始め、「実方」「采女」「井筒」にも使われている。また「問答条々」の「しほれたる風情」には、小町の「色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」を引き、『花伝』第七「別紙口伝」には「人々心々の花」の語について説いている。

五十六歳の良基が十三歳の藤若に対する思いを述べたこの書状について、諸先学は「恋情のはげしさに今更のように驚かされた老醜の悲しさと哀さを告白した恋文」(伊地知氏)、「情熱的な恋文まがいの文章」(表氏)などと評されているが、「埋れ木に：」「心の花も：」という表現は、和歌などで常套的に使われる類型表現を用いたもので、これをあまり文面どおりに受け取る必要はないのではなからうか。良基が藤若の容姿と才能に惚れ込んだの

は事実だろうが、これは藤若の若々しい舞を見、我が身の老いを忘れて若やいだ気分になつたといった程度のことを定型的な表現を用いて記したと捉えた方がよいだろう。

老連歌師が美しい稚児に出会い、心をときめかせるという設定は、これ以前にも存在した。『太神宮参詣記』（群書類従第二輯）は、足利尊氏に仕えた医師で連歌師の坂十仏（後小松天皇、足利義満らの侍医を務めた土仏の父）が康永元年（一三四二）に書いた伊勢参宮の紀行文である。十仏は宿所の山田三宝院で連歌を興行した。その部分の記述を以下に引く（適宜表記を改めた）。なお、この記事の存在は伝承文学研究会第二九五回東京例会（平成13・11・18）での笠島正幸氏の口頭発表『「稚児物語」と、連歌師」により知った。

着座十余人。笠着群衆せり。その中に垂髪あひまじはりて、花やかなる句などを出だし侍りしかば、老氣いよくまどひやすく、愚案さらに及びがたし。

忘るなと書きをく文の一筆に
といふ句の侍りしに、

人のなみだを思ひ出でけり

と垂髪の付けて侍りしかば、諸人詠吟耳を驚かし、満座の感嘆腸を断つ。年久しくこの道に心がけたる身は、明け暮れ聞き取り、わざの古きことのみを連ねて、胸の内より出づるまことはさらになきものを、この垂髪のはひ、よも志学を出で

じと思ふ心の底より、かかるやさしき言葉の聞え侍るありがたさよとあやしくて、住みかはいづくなるらむとゆかしくおぼえしかども、ころざしを告げやりぬべき花鳥のつかひもなし。夜という文字を懐紙にとどむるばかりにて、行方も知らずなりぬ。

一座にいた十五歳以下とおぼしき稚児がすばらしい句を詠み、満座の称賛を浴びた。十仏はこの稚児に心引かれ、手紙を渡して住みかを尋ねたいと思つたが、よいつてがなく、かなわなかつた。稚児は懐紙に「夜」という文字だけを残して消えてしまった。

また、『七十一番職人歌合』『猿の草子』に描かれるように、連歌の執筆は稚児が務めるのがならわしであつた。連歌の興行は老連歌師と稚児が出会う場でもあつたのである。時代は下るが、『宗長日記』にも宗長が執筆の稚児を称賛した記事が見える。『隔賞記』明暦四年（一六五八）六月十二日条には、喜多寿硯の子で十一歳の清七が、貞室らの行つた百韻連句の執筆を見事に務め、句も作つたことが驚嘆をもって記されている（表章氏『喜多流の成立と展開』四九五頁）。

老連歌師が連歌の場で才色兼備の稚児に出会い、我が身の老いを忘れて心ときめかせるという構図は、歴史上現実にも何度もあつたに違いないが、この設定はひとつの文学的类型でもあつたことになる。また御伽草子には僧

と稚児の恋愛を描いた稚児物の作品が多くあるが、『幻夢物語』では僧と稚児の連歌が、展開上重要な役割を担つている。良基は自分と藤若の関係を、文学的構造の中に置いて物語の登場人物になぞらえ、虚構と現実を巧妙に錯綜させる形でこの書状を書いたのだろう。老人が稚児に恋文を出すことは、文学的枠組の中では風雅な行動であつたはずである。

書状の形式を借りて、その中にさまざまな語彙や表現を盛り込んで文章を構成するという方法は、『明衡往来』『庭訓往来』などの往来物にも通じる。ただし、これらは漢字片仮名交じりの漢文訓読体である。より良基の書状の作文法に近似するものに、御伽草子の中で登場人物が書く恋文がある。たとえば良基の孫の一条兼良の作とも言われる『鴉鷲物語』では、烏が鷲の娘に恋文を出す、これは和歌的修辭を駆使した和文体のもので、良基書状の方法にきわめて近い。

良基が美文を弄して書状を書いたのは、表氏の説かれるように、義満が読むことを期待したということながら、藤若の美貌と才能が当代随一の文学者の創作意欲を刺激したということが、何よりも根本的な理由であろう。そして良基は宛先である尊勝院をまず第一の読者として意識しつつ、この文学作品を創り上げたのである。

（法政大学能楽研究所員）